

寝屋川市地域福祉計画推進委員会 要旨

日 時 平成26年3月28日 14:00～15:50
場 所 市立総合センター 4階第1研修室
出席委員 佐々木委員 中嶋委員 長谷川委員 藤本英祐委員 藤本宜男委員
丸山委員 三和委員 山本委員長（五十音順）
欠席委員 越智委員 白川委員 早川副委員長 山田委員（五十音順）

1 道上保健福祉部長あいさつ

2 委員・事務局職員等の紹介

3 経過の説明

- ・平成23年3月に第二次寝屋川市地域福祉計画を策定した後、平成23年度に寝屋川市高齢者保健福祉計画、寝屋川市障害福祉計画を策定し、平成24年度から推進している。
- ・計画の進捗管理を目的とする委員会は、平成24年度は「寝屋川市地域福祉計画推進評価委員会」として開催し、平成23～24年度の進捗状況を報告した。平成25年4月1日からは市の執行機関の附属機関として条例に基づく委員会に移行した。また、これにともない市民公募委員2名をお迎えした。

4 資料確認

5 委員長・副委員長の選出

- ・委員長について、事務局案として計画策定時に委員長を務めていただいた山本委員を提案し、承認された。
- ・副委員長は、山本委員長が計画策定時に副委員長を輩出した医師会からの選出を指示し、今回欠席の早川委員への連絡は事務局が行うこととした。

(山本委員長あいさつ)

昨年度の委員会は欠席したが、新たに公募委員2名が加わり、フレッシュな気持ちで臨みたい。計画の推進において進捗管理は重要であり、介護保険や障害福祉の新たな計画づくりの先鞭を切って情報を把握したいと考えているので、ご協力をお願いしたい。

6 案件

(1) 第二次寝屋川市地域福祉計画の平成25年度の進捗状況について

(事務局 資料に基づき説明)

[補足事項]

- ・昨年度の委員会で、進捗状況を数値化した方がわかりやすいのではないかというご意見をいただき、検討したが、本計画は寝屋川市の地域福祉のマスタープランとして、他の計画や民間の取り組みを含めたさまざまな実績に関わることや、理念計画のため終着点を数値化しにくい事業もあり、事業によっては数値化せずに現状を記載することで進捗状況を把握できるようにしている。
- ・資料は、昨年度に報告した資料に平成25年度の実績を付加しており、平成25年度の実績は網掛けで示している。

(山本委員長)

地域福祉計画には地域福祉だけでなく、さまざまな分野の事業が含まれており、対象となる年齢も多岐にわたっている。そのなかで、事務局には市・社協の事業の進捗状況を報告してもらったが、さらに委員のみなさんから、地域のなかでの動きや課題を聞かせていただき、他の計画も含めて反映していくというのが本日の趣旨である。気づいたことについて、意見や質問をいただきたい。

(丸山委員)

地域福祉計画の目標は、障害のある人もない人も地域で安心して生活できる、ということだと思うが、昨年、障害者団体が危機管理室に災害時の取組みの現状を聞いた際に、10～12月は忙しいので回答できないと言われた。いつ起きかわからない災害への対策については、早急に対応していかなければならない。法律が改正されて災害時要援護者をリストアップするなど対応が必要であるが、市は国とは意識の差があり、二次避難所もできていない。

社会参加についても、市内にベンチが少なくなったことで、高齢の人や障害のある人の外出が難しくなっている。これは予算がなくても知恵を使えばできることなので、検討してほしい。

自助・共助・公助により地域でお互いに協力するよう、コミュニケーションを取っていかねばならないが、市はアンケートなどでも書類を送ったということで終わっている。送ったことと理解したことは全く意味が違う。地域の集まりに参加しない人についても、なぜ来ることができないのかということまで踏み込んでいかなければ、本当の意味でのニーズは掴めないと思う。障害者団体が独自に行っているアンケートもあるが、市も利用者の立場に立った考え方でやってほしいと思う。

(山本委員長)

非常に重要なご指摘である。地域の集まり等に参加できない人への配慮も含めて、取組みを充実させてほしいという要望である。

(事務局)

災害に関する取組みについては、危機管理室で対応している部分と、福祉避難所などの福祉施策に関わる部分があるが、福祉分野が中心となって伝える方法の検討など情報提供のしくみづくりが重要だと考えている。市が取組む部分、地域の共助の部分、当事者の自助の部分を認識し、検討していきたい。

(山本委員長)

東日本大震災では、行政の人にも大変な犠牲が出たことが大きな教訓であり、行政は自助が難しい「災害時に弱い立場に置かれがちな人」をまず意識して早急に取り組んでもらえるよう、地域福祉計画の立場から危機管理室に要望してほしい。これは委員長の立場で思うことである。東大のある先生が3月中に南海トラフが動くと予言した。いつ起きてもおかしくない状況になっているという意識で動いてもらわないと教訓を活かせない。公助・共助・自助は対話しないと機能しないので、地域福祉計画の関係者から点検をしていく必要がある。

(藤本英祐委員)

災害時の共助について、他府県から来て寝屋川市の地域を知らない人に手伝ってもらうのは難しいと思うが、市や社協がどのように考えているのか不安である。

(山本委員長)

まずは議論してマニュアルをつくっておかないと、大変な混乱になる。

(事務局)

社協が東日本大震災の被災地に赴き、視察した状況をふまえて、災害ボランティアセンターとしてのマニュアルの作成や講習会を行っている。

(藤本宜男委員)

私は介護サービスを利用しているが、ごく小さな地域福祉の活動にも携わっており、丸山委員も言われたように、現場の声があまりにも行政に伝わっていないのが現状だと思う。また、

「福祉」という言葉が濫用されて、住民は地域福祉の中身が理解できなくなっているのではないか。地域によって違うと思うが、最も小さなエリアである自治会のコミュニティが崩壊しつつあり、行政との狭間ができて右往左往しているという印象を受けている。こうしたなかで、市民の生の声を代弁できればと思って、この委員会に参加させていただいたので、今後ともよろしくお願ひしたい。

(山本委員長)

その立場で、何かご提案はないか。

(藤本宜男委員)

丸山委員がほぼ言われたが、私が一番に願っているのは、最小規模のコミュニティの構築に取り組んでほしいということである。難しいことだと思うが、なんらかの知恵などを提供してほしいと望んでいる。

(山本委員長)

行政はコミュニティの最小単位に細心の注意を払い、ニーズに関心をもってほしいということである。

(長谷川委員)

進捗状況が空白の項目があるが、どのように考えればよいか。

(事務局)

地域福祉計画は、アンケート調査等をふまえて課題を整理し、解決すべき事項を定めた計画だが、マスタープランとして理念計画的な面もあるため、実施が決まっていない項目もある。課題の解決に向けて取組みを進めるよう検討していきたい。

(山本委員長)

地域のコミュニティ、また、それに関わる問題は日々変動しており、計画策定時の議論からも変化していることを認識する必要がある。分野別計画は厚生労働省がガイドラインで数値目標を示しているが、地域福祉計画は義務づけられておらず、少し色合いが違う。分野別計画と連動して活かしていく「つなぎ」の役割があるので、この計画だけですべてを達成するというものではない。行政は法規に則ってしくみづくりをするエキスパートで、それを活かしていくには民間とのパートナーシップが必要だという計画である。本日は、市と社協で取り組んでいる事業の進捗状況を報告してもらったが、その後の議論が非常に重要である。公助・共助・自助は線引きができないので、民間の立場から知恵を出して充実していくよう、ご意見をいただきたい。

(三和委員)

地域福祉計画ができて3年が経過したが、この間に寝屋川市の福祉は良くなったのかどうかということをもっと明確にした方がよいと思う。課題はいろいろあるが、全体としてはいい線まで来ているのではないかと私は思う。いろいろな地域で活動しているが、豊中市と寝屋川市は大阪府内ではいい線に達している。また、「かぎ預かり事業」などの特に良い事業、取組みを、市民に知ってもらふ必要があると思う。PRすることで、市民の意識も高まってくると感じる。

資料には市と社協がしたことしか書かれていないが、私に関わっている「高齢者サポートセンター」などをはじめ、市民がしていることはもっとあるので、それらも取り上げていけば、市民と行政が一緒にしているという感じになると思う。

この計画はあと2年あるが、国の政策はどんどん変わっており、それらをどう受け止めていくのか。例えば、介護保険制度の改正が27年度から実施されるが、そうしたことについてこの委員会では議論をしないのか、ということが気になっている。

(山本委員長)

1点目は元気のでるご指摘で、もっと現状をPRすべきということであり、広報活動をして

もらえばよいと思う。そうした寝屋川市の福祉を後押ししている主体には、NPOやさまざまな市民の団体もあるので、視野を広げて進捗管理を行っていく必要がある。また、地域福祉の立場で国の政策について議論する場も必要だというご指摘であり、検討して反映してほしい。

地域福祉計画は市民参加型の計画なので、「こんなに頑張っている」という激励も含めて網羅していけば、潜在的なものも出てきて、充実していくと思う。

(三和委員)

今日はじめて資料を見て、意見を言うのは難しいので、何日かの時間をもらって、良いことも悪いことも提案できるようにしてもらえるとよい。

(山本委員長)

次回からは資料に「コメントペーパー」を付けて、宿題にってもらえるとよい。

(中嶋委員)

私は公募委員として参加している。以前は、地域福祉のことをあまり知らなかったが、仕事を離れて時間があるので、寝屋川市の広報は詳細に見るようにしている。そこに掲載されている認知症予防、介護予防などのいろいろな講座に参加して介護予防のサポーターになり、地域で「元気アップ体操」の補助ができるようになった。

寝屋川市は近隣の市と比較して地域福祉に関わる活動をよくやっていると見ていた上に、委員会に参加してみなさんのお話を聞き、理解がより深まった。また、資料を読んで、各事業の担当課がよくわかったが、高齢者が増えているにも関わらず老人クラブの会員数が減っていることはなぜかと疑問に感じた。

(山本委員長)

私も寝屋川市は福祉の水準が高い自治体だと思っており、中嶋委員にも「寝屋川市の福祉は素晴らしい」というこの委員会での意見を地域で広めてもらえれば、ボランティアの人も活気が出るし、参加したいと言う人も出てくるので、ぜひお願いしたい。地域福祉の狙いどころはモチベーションを高めて元気になることであり、批判しあって暗くなって帰るのでは、地域福祉には合わないと思う。三和委員がNHKの新・ルソンの壺に出演されたときの内容を、授業で取り上げさせていただいたが、これも寝屋川市の地域福祉の活動が承認されたということで、元気になる。「明るい寝屋川」でやっていくよう、お願いしたい。

(丸山委員)

3月中に地震が起きるかもしれないという話を聞いて、背筋がぞっとした。東日本大震災の経験で勉強になったのは、ヘリコプターの使い方である。多くの人が避難しながら津波にのまれてしまったが、ヘリコプターは余っていた。ヘリコプターが支援のためにどこに行けばよいかかわからなかったということであり、寝屋川市においては校区ごとにどこに降りられるのかということや、SOSの合図などを決めておけば、かなりの人が助かるのではないかと思うので、危機管理室にお願いしてもらえるとよい。

(佐々木委員)

民生委員として地域に密着した対応をしないといけない立場にあり、ひとりも見逃さない対応をするよう言われているが、さきほども地域のコミュニティの問題が指摘されたように、どこに誰がいるかがわからない。ひとり暮らしの高齢者は、調査を行っているので大体は把握できているが、高齢夫婦や障害者、その他の困っている人は把握できない。危機管理室が災害時要援護者の名簿をつくっているが、自治会長にしか渡していない。民生委員も支援が必要な人がわかったうえで活動できればよいと思っているので、危機管理室に要望してほしい。

(山本委員長)

要望が続いているが、市民あつての地域福祉なので、行政の配慮も必要である。激励してモチベーションを上げることも、計画をすすめるうえでの大切な仕事だと思う。

(藤本英祐委員)

幸福度調査で大阪府は47位だったと、テレビで見た。地域福祉計画にも「福祉」は「ふだんの、くらしの、しあわせ」だと書かれており、福祉と幸福度は関係が大きいことだと思うので、「寝屋川市の福祉はすすんでいる」という議論との関係が、よくわからない面もある。

老人会の会員数について、私は市の老人クラブ連合会の理事をしているが、特に団塊の世代の人には枠に入れられるのが嫌だという風潮があり、老人会にもボランティアにも参加したくない人が多い。また、70歳の人に声をかけても「まだ老人ではない」と言われるなど意識の違いもあり、全国的に会員を増やす活動を行っているが、難しい問題である。

(山本委員長)

今の日本の中高年は元気であり、「まだまだ若くいたい」と思うなかで、老人クラブという名称の問題がある。また、団塊の世代は、一般的に縛られることが嫌いである。コミュニティの中で行動を共にしようとするときに、どういう言葉で呼びかければ共感を得られるかということも、時代の流れのなかで変化していることだと思う。

幸福度は「自分自身の幸福度」であり、人によって違う。したがって、地域福祉計画では幸福度とともに「共感」が大切である。寝屋川市で孤立死や虐待が起きたときに、同じ地域で住んでいる人として「なぜ、そうなったのか」、「何かできることはないか」と考えることも、共感から始まっている。大学での授業を通じて、今の若者は共感力が低いと感じているが、それは実際の体験から人との関係を知らないからではないかと思う。「体験しよう」、「共感力を持つよう」ということが地域福祉だと思うので、寝屋川市で取り組まれていることを名前も出して広報していけば、もっとやる気になる。「褒めて動かす」のが地域福祉だと思うので、次回以降は、人を動かすにはどうすればよいかも考えていきたい。

本日、各委員から出された貴重なご提案を、関係部局と調整し、計画づくりへ反映していくということを、事務局の宿題としたい。

(2) 今後の予定について

(事務局)

本委員会は計画の進捗管理を行うものと位置づけられており、各年度の実績をふまえた年度末の委員会は今後も継続していきたいが、その他に意見があれば、参考にさせていただきたい。

(山本委員長)

年度末に進捗管理のまとめをするのは当然だが、さらに現場の声を届けることも重要なので、提案があれば聞かせてほしい。

(丸山委員)

年1回だけでなく、中間ぐらいにも開いてほしいと思う。

(山本委員長)

年にもう1回は必要だというご意見が出たので、年2回開催する方向で検討するということによいか。

また、次回から資料に「コメントペーパー」を同封し、コミュニケーションのツールとして、質問があれば回答してもらおうこととしたい。

(三和委員)

もう1回の委員会は、9月ぐらいに開催するのか。

(事務局)

本日欠席の委員もおられるので、時期は調整させていただきたい。中間報告をさせていただく場として、委員会でいただいたご提案についての進捗や、他の計画の進捗を報告させていただく。

(山本委員長)

地域福祉計画について、他市の状況や社会情勢はどうか。

(アドバイザー)

他市の地域福祉計画にも関わらせていただいているが、本日は前向きなご意見をいただき、寝屋川市の地域福祉の力をあらためて感じている。この計画は「1+1を3に！」を目標にしているが、寝屋川市には「1」がたくさんあるので、もっと膨らませたいということである。表紙に「地域福祉に関わる“みんな”が意見を出しあってつくりました」と書いてあるが、これも他市の計画ではまずない。進捗状況の資料に空白の部分があるのは、「わたしたち」を主語とした計画なので、市だけではできないこともたくさんあるからである。それを埋めていく必要があるが、行政は公平でないといけないので、一部の企業や市民を対象に働きかけることが難しい。そのため、市民も参加していろいろな情報を集めていければよいと思う。この委員会は様々な立場の方が対等に議論できるように、できれば「円卓」で開催できればよいと思う。

(山本委員長)

以上で案件は終了した。貴重な意見をいただき感謝している。私も元気が出た。今後もよろしく願います。

(閉会)